

日本両生類研究会  
第14回両生類自然史フォーラムを終えて  
大会委員長 林 光武

第14回両生類自然史フォーラムは、2012年8月25日(土)に、栃木県宇都宮市の栃木県立博物館で開催された。これは北陸地方以外で開催された初めてのフォーラムとなった。関東地方では初めての開催とあって、正直なところ参加人数の予測が難しく、北陸地方から交通の便が悪い宇都宮市まで足を伸ばしていただけるだろうか、近隣の関東地方からは多くの方が参加されるだろうか、それとも例年並みの参加にとどまるのだろうか、運営側としては気をもんだ。結局、新潟県、富山県、石川県の北陸地方の3県からの参加者は6名とやはり少なめで、栃木県、群馬県、茨城県、埼玉県、千葉県、東京都の関東1都5県からの参加者が14名と人数的には多数を占めた。また、岐阜県、広島県の2県からそれぞれ1名ずつ参加いただいた。このように各地からお集まりいただいた22名の参加者が、夏の半日、両生類談義に花を咲かせた。

まず午後1時に内山 実 会長に御挨拶いただいて開会し、特別講演で筆者が栃木県の両生類の話題を紹介させていただいた。さらに7題の一般講演が行われた。

講演の内容の詳細は講演要旨に譲るが、小林教太氏による「コイによるニホンアカガエルの捕食例」では、コイの口の中に生きているニホンアカガエルの成体が取まっている写真が印象的であった。小規

模な池などにコイを放流すると、そこに生息していた両生類が絶滅あるいは激減することが経験的に知られているが、この報告は捕食の直接的な証拠を示したものであった。熊倉雅彦氏らの「新潟県金塚地区におけるトノサマガエルの性比」では、かつて性比の偏りが報告された地域における継続調査の結果が報告された。継続的な調査の重要性と共に、環境の変化によって個体数が減少してしまうと継続調査そのものが困難になるという問題を感じさせた。内山 実 氏による「クロサンショウウオ幼生と魚の鰓をイオン輸送から科学する」は、上皮性ナトリウムチャンネルのサブユニットに関するシーラカンス、ハイギョ、両生類の比較を通して、生理学的メカニズムの系統発生と個体発生について考察されたスケールの大きな発表であった。青柳育夫氏による「栃木県のトウキョウサンショウウオ」では、2003年と2008年に実施した栃木県全域のトウキョウサンショウウオ産卵地の卵嚢数調査の結果が報告された。産卵地の数が減少しただけでなく、産卵地当たりの卵嚢数も減少傾向にあり、生息状況の悪化が明らかになった。吉村雅子氏による「蛙曜日の夜

第3弾：お山はきょうも晴天だ」は、古代米を無農薬栽培している棚田で、四季を通じた風景や農作業の移り変わりを、そこに生息するカエル類の姿と共にスライドショーで示したもので、両生類と人の営みの関係についてしみじみと考えさせられた。南部久男氏による「富山県のホクリクサンショウウオ」では、富山県内の産卵地の卵嚢確認数の経年変化からホクリクサンショウウオが減少していること



林 光武 大会委員長



内山 実 会長



小林 教太 氏



熊倉 雅彦 氏

が報告された。龍崎正士氏による「タゴガエルの種分化」では、タゴガエル内に核型が異なる集団が認められることを中心に、“タゴガエル”と呼ばれるものの中に複数の隠蔽種が含まれていることが発表された。

一般講演終了後には総会が開催され、その後、ホ

テルニューイタヤにおいて15名の参加者による懇親会が行われた。

今回は、関東地方で初めてのフォーラムということで不安もあったが、事務局の熊倉雅彦氏の懇切な御指導と、参加いただいた皆様の両生類学および日本両生類研究会への思いに支えられて滞りなく運営することができた。心より御礼申し上げます。



青柳 育夫 氏



吉村 雅子 氏



南部 久男 氏



龍崎 正士 氏

